



Title	冷戦下の『希望（エスピワール）』：原子力のグローバル化との対峙
Author(s)	鳥羽, 耕史
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 97-109
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

冷戦下の『希望』 —原子力のグローバル化との対峙—

鳥 羽 耕 史

はじめに

朝鮮戦争が実質的な休戦状態に入っていた1952年に創刊され、いわゆる五五年体制が確立することになる1955年に刊行を終えた東京版『希望』^{エスポワール}は、まさしく冷戦下の雑誌として、サークル誌の系譜の上でも、文学史の上でも、大きな意味を持つものでした。その詳細を検討する前に、まず広島版の成立という前史から振り返ってみましょう。

1. 被爆地広島でのサークルの成立

広島で『Espoir』という雑誌が、ESP文化サークル総合誌という副題をもって創刊されたのは、1948年11月のことでした。巻末に掲げられた33名の会員名簿を見ると、女専（広島県立広島女子専門学校）と広高（広島高等学校）の学生が大半を占め、文理大（広島文理科大学）、高師（広島高等師範学校）、東大（東京大学）、三高（第三高等学校）の学生が一、二名ずつ混じっているという構成です。そもそもは広高の理科にいた河本英三らが1947年7月にはじめた学生数名の集まりが、同年11月に創刊した回覧原稿雑誌『青い実』がその母体となっていて、1948年6月までに6号を発行した後、本格的にはじめたのがこの雑誌だということです。

1949年1月5日にはガリ版刷の『ESPOIR WEEKLY』Vol.1, No.1も創刊、12日にNo.2、19日にNo.3、26日にNo.4、29日にExtra、2月2日にVol.2, No.1、9日のNo.2から活版化し、16日にNo.3、21日にNo.4、3月9日に第9号、15日にVol.3, No.2、29日にNo.3・4、4月19日にVol.4, No.1・2を刊行しました。こちらの発行責任者は第9号以外一貫して鈴木純一郎が務め、河本はVol.1, No.3に「金井利博氏“物質の延長としての人間”をよみて」という前号掲載論文へのコメントを寄せる程度の関わりでした。しかしExtraには「危機に当って」と「T君に寄す」の二つの文章を掲げ、前者では「あくまでも意欲と熱情に依って結び合ったヤンガーゼネレーションのオアシスであり、泉であり、牙城であること」を根本理念とするサークルの危機を訴え、後者では「新しい意欲をひっさげた君」すなわち僕やすをに対して、「これまで、形而下的なことばかりやって来て、その意

冷戦下の『希望』（鳥羽耕史）

欲を疲らせたメンバーを、再びやたらに外部的なことにかり出して、その意欲を失わせてはならない」と牽制しています。それに対して、僕はVol.2, No.1とNo.2に「これから運営」を連載し、文学部、社会部、映画部、演劇部などにセクションを分けた運営の構想を語りました。第9号のみ編集を引き受けた河本は、「フランス文化の一動向と若き世代の文化活動」という巻頭論文で、不安絶望よりも意欲と行動と希望が芽生えつつあるという戦後フランス文化の展望を描き、「流行的なバカさはぎではない」私達の文化活動について述べています。さらに河本は『ESPOIR WEEKLY』の題字の横に、以下の引用を入れ、雑誌名の典拠を明らかにしています。

「おい、ロベーツ、俺はもう人間つて奴にはつくづくうんざりしてゐるがね」

「今はうんざりしてゐる時ではないよ」……

「とは云ふもののね、希望に大きな力があるつてことは本当だな龜公！」

　　アンドレ・マルロー「希望」より

この号の論文と引用の組み合わせからは、フランスのことに言寄せながら、僕らの方針に異を唱える河本のスタンスが想像できます。しかしこれ以降、河本は『ESPOIR WEEKLY』の誌面に登場はしても、運営については触れなくなりました。GHQの検閲終了のためか、プラング文庫資料に残されているのは1949年4月19日刊行号までです。その間、Vol.1, No.4とVol.2, No.3にはGHQの検閲資料が残されていますが、前者ではNon-political、後者ではLeftistでもRightistでもないCenterと記され、稳健な雑誌と見なされていたことがわかりますし、実際にそうした内容です。

さて、『Espoir』本誌のことに戻りましょう。1949年5月の2号でも38名だった正会員は、会員数を50名に限定して創造と研究討論による文化総合雑誌を作ろうという河本の意図に反して、会員証での映画割引目当てで激増しました。その後、組織形態についての意見の異なる僕やすを、鈴木純一郎ら数名が脱退し、仮称・エスピワール文化協会、のちに日本文化平和協会を作りました。この協会名が、創刊号の目次の下に後援として載り、発行所の場所にもなっている日本文化平和協会と同じなのがどういう事情によるのかは、まだ調査できていません。学生たちのサークル誌には不似合いな豪華な活版印刷でスタートしたこの雑誌に、広告を寄せている地元企業だけでなく、編集後記で言及されるような先輩知己による多くの支援があったことは想像に難くありませんが、それ以外の資金の提供があったのかどうかという問題と含め、今後の調査が必要なことかと思います。

さて、残った河本らは1949年10月に3号を出しますが、巻末の会員名簿は同人名簿と名前を変え、69名の同人に加藤周一、小松清、羽白幸雄の編集顧問を迎えた大所帯とな

ります。学生だった人々が卒業した上に社会人も加わったため、同人の所属も東京の教師から広島の教組、謄写業、電鉄、中国新聞、商工会議所などと幅広くなり、中には東京の労働省で働く同人まで現れました。しかし広島でのエスピワール文化サークルの盛り上がりはこの号までで、『エスピワール評論』という別雑誌も創刊しましたが1950年暮れに廃刊となり、1951年6月にガリ版刷の4号を出して終刊となりました。河本は東京大学に進学したため、広島での編集を創刊時からの盟友の落藤久義に託しつつ、発行所としては広島と東大北寮の二カ所を記していましたが、やはり広島でのリーダーを失ったサークルからは求心力が失われてしまったのでしょうか。このように経緯をたどってみると、広島版『Espoir』は岩崎清一郎が「サークルの創始者であり指導者」であったという河本の個人誌のようにも思えてきますが、その誌面からは彼らのサークルの活発な活動の様子が垣間見えます。少しくわしくその内容を見てみましょう。

創刊号では「杉村春子をかこんで」と「前進座青年劇場をむかえて」という二つの座談会の記録が掲載され、広島を訪れた二つの劇団の関係者を囲んで、広高の演劇部での経験を交えながらエスピワールの五人ほどが語るのが印象的です。2号でも「東宝映画女の一 生研究批評座談会於銀座東宝」が、上京したメンバー六人あまりが銀座東宝支配人を囲む形で行われ、映画のテーマからパンフォーカスなどの技術、そしてイデオロギーの面に到るまで、活発な議論が繰り広げられています。同号ではまた、前号に掲載された佐々木昭子「二葉亭文章考」をめぐり、鈴木純一郎による批評と佐々木による応答の「紙上討論」も掲載され、会員間での議論の様子を見せててくれています。さらに編集後記では1949年1月5日から『エスピワール・ウイークリ』を発刊していること、正会員とは別に友の会を結成したことが僕によって紹介されています。後者はエスピワール文化サークルの分裂の遠因になったものと思われますので、すべてを肯定することはできないかもしれません が、様々な試みをしながら会が発展していった様子を窺うことはできるでしょう。3号には編集顧問に就任した三人のうち加藤周一と羽白幸雄がエッセイを寄せ、学生中心のグループに上の世代の視点を加えました。同時に新設された「青い実赤い実」というコーナーには同人名簿にない書き手の小文も載せ、編集後記では「カム、カム、エブリボディ！ どうし読者の御投稿あらんことを待っています」と、当時流行のカムカムイングリッシュの口調を真似ながら、同人外からの投稿を呼びかけました。これには、僕らの友の会の路線とは一線を画しながら、サークルを広く開いていくとした姿勢が見てとれるでしょう。

しかしながら、ガリ版刷となった4号では、詩人栗原貞子が土居貞子名義で原民喜の詩碑について寄稿し、金井利博が「善意と良識との社会化」と題してこのサークルを社会運動へ展開すべきだというアジェテーションを寄せている二つだけが外部からの投稿で、「青い実赤い実」欄は消えてしまいました。河本によるアンドレ・モーロワ「アメリカより帰

りて」の翻訳、岩田タカシによるヴエルコール「夜の武器」の翻訳（未完）も同人の原稿とは質の違うものですが、広島を訪れた学者の講演を翻訳して2号に掲載されたエドモンド・ブランデン「現代英國作家」とは違い、海外の雑誌や本からの紹介の形となりました。編集後記で「紙数の関係で、ごく短い原稿しかのせることが出来なかつた。多くの力作を、次の機会に譲らなければならなかつた」とされていますが、少なくとも広島版としては、その機会は訪れませんでした。

2. 『われらの詩』との類似と相違

広島版『Espoir』の創刊号から3号までが刊行された1948年11月から1949年10月という時期は、1949年11月の『われらの詩』の創刊に先立つ一年間でした。そして間をおいて4号が刊行された1951年6月は、『われらの詩』の11号と12号が刊行された間の時期ということになります。二つの雑誌は、前後して広島で刊行され、その時期はわずかながら重なっていたのです。ここで二つの雑誌に共通する問題を三つ挙げておきましょう。一つ目は、占領下で原爆をどう描くかという問題、二つ目は、広島の人間は原爆を語ることに拘束されるべきかどうか、という問題、そして三つ目は、文化運動は同時に社会運動であるべきかどうか、という問題です。

最初の問題に関連する小説としては、2号の河本英三「絶望の市にて」、そして3号の「反戦創作特集」に寄せられた河本英三「不吉な黙劇」、中川典子「星くず」、川本順「終戦前後」の三本が挙げられます。「放射能に関する恐ろしい噂が伝へられて間もなく、〇大学病院にもその最初の患者が運び込まれ、病院中は異常な戦慄に襲はれた」とはじまる「絶望の市にて」では、原爆症の発症におびえる被爆者たちの群像の中に、一組のカップルの子供の誕生と、退院後にアルバイトで彼らを支援する友人が描かれます。同じ河本による「不吉な黙劇」では、原爆から四年を経た広島の街のあちこちで、被爆当時の記憶を蘇らせながら生きる「僕」の内面が描かれます。「星屑」は、原爆で家族を失い、目標を失って高校受験もせずに叔父のお寺で暮らす信一が、疎開中に父母と弟を原爆で失った幼い姉弟に出会い、彼らを慰めながら自らを見つめ直す話になっています。「終戦前後」は創刊号に掲載された「終戦前後の私達」の続編で、高等師範学校から工場に動員された「私達」の1945年7月までを描いて終わった前作に続き、いよいよ8月6日が描かれます。工場から「一つの新しい美しさとも誤られさうな奇観」としてきのこ雲を眺めた「私」たちは、夕刻から市内に救援に出かけ、「ローマを焼き払った暴君の心理と、『地獄変』を書いた芥川の眼をおもひ浮べ見つめながら、慄然と」します。そして終戦後、友人の中村の家の焼跡に行ってみて、「全員無事。田舎に帰れ。」の板きれを見つけた中村と「私」は、笑い合って別れる、という話になっています。

占領期のCCDによる検閲について確認できる20世紀メディア情報データベースで『Espoir』を調べると、創刊号と2号は検閲のためにゲラが提出されたことがわかりますが、検閲のコメントがついた形跡はありません。つまり「絶望の市にて」は検閲をパスしたということです。3号が出された1949年は、ソ連の原爆の所有が明らかになった年でもあるため、「占領軍としては、一方では原爆の恐ろしさを日本人に知らせて威嚇しながら、一方ではアメリカは平和のために原爆を投下したということを宣伝しつつ、原爆にかんする出版を部分的に許可したのであろう」と松浦総三は推測しています。この号に「反戦創作特集」が組まれ、原爆に関わる三本の小説が掲載されたのには、こうした事情に加え、事前検閲が終了した年であったことも重要でしょう。4号に原爆小説が見られないのには、前年に開戦し、原爆使用も検討された朝鮮戦争下での弾圧の強化も関わっているのかもしれません。

しかし、『Espoir』での原爆表象は、『われらの詩』に比べると控えめなものでした。原爆の残酷さが大きく強調されることはありませんし、被爆経験は、基本的に人生の過程の中で乗り越えるべき苦難として表象され、一種のイニシエーションのようにすら語られているのです。

二つ目の、広島の人間は原爆を語ることに拘束されるべきかどうか、という問題は、『われらの詩』が『われらのうた』に継承されていく過程で、また、さらに若い世代が広島で文学を始めていく時に、くりかえし議論されたものでした。『Espoir』における原爆の影の薄さと、『われらの詩』に比べて知的で洗練された編集とは、検閲による影響以上のものを感じさせます。つまり、戦後の若い世代のサークルとして、戦争のことよりも今後の新しい文化のことを語ろう、という志向が『Espoir』には感じられるのです。それはまた、先に見たように原爆をイニシエーションとして通過し、健全な生を目指す若者として生きていく、というこの雑誌における原爆小説のパターンとも通底しています。

三つ目の、文化運動は同時に社会運動であるべきかどうか、という問題において、『われらの詩』と『Espoir』は対照的です。日本共産党広島県委員会との関係がきわめて深く、共産党分裂当時の主流派（所感派）に対する國際派として活躍したメンバーを多く含むわれらの詩の会において、文化運動が社会運動とともにすることは自明の前提でした。それに対し、『Espoir』は政治的な問題とは距離をおいて純粋な文化運動を志向したため、先に見た4号での金井利博による、この雑誌にあふれる「善意と良識」とを「社会化」していくべきだ、というアジテーションを招くことにもなったのです。

3. 冷戦下東京での雑誌の刊行

広島版『Espoir』の4号が出てから半年後の1952年1月、駒場東大構内エスボワール

冷戦下の『希望』（鳥羽耕史）

編集室を発行所として、東京版『希望』が創刊されました。既に編集顧問に迎えていた加藤周一、小松清の他にも、矢内原伊作、安部公房、白井健三郎ら東京の作家や学者の評論を揃え、さらに幅広い作家にアンケートを募った他、近代文学と自由美術のメンバーによる「新らしい芸術運動について」という討論会まで並べた構成は、広島版からは面目を一新し、かつて花田清輝の編集で真善美社から刊行された『総合文化』を思わせるような洗練された文化雑誌の趣をもっています。まだ学生であった河本にこのような編集が可能であったのは、被爆直後の調査で広島に来た加藤周一との縁や、東大での先輩関係などをフルに活用した結果かと思われますが、詳しい事情はわかりません。広島版の同人名簿で確認できるのは、木田律子名義で「私達は結婚しない」を書いた渡部美智子と創作「パール」を書いた落藤久生こと久義、それに巻頭に「文学抹殺論——マニフェスト」を書いた河本英三です。

河本のマニフェストは、タイトル通り挑発的なものです。商品としての文学をマルクス経済学的に分析し、その顧客としての大衆が社会のメカニズムに順応していくことでデカルダンスに陥り、文学を抹殺すると説いています。さらに彼は、原民喜の自殺に触れ、原子爆弾が、日常性の基底の亀裂を意識させる、二十世紀の人間の条件を露わにした契機であるとし、その亀裂を忘却しようとする大衆を、原民喜以上に病んでいると述べています。この分析は、広島版の4号に掲載された土居（栗原）貞子「埃っぽいこと一原民喜の詩碑について—」の原民喜評価を想起させるものです。土居こと栗原は、「自ら生命を放棄し生に敗北した人の碑をつくると云うことは、広島の場合、それでなくても原爆の痛苦を受け生に疲れ倦んだ市民に自殺をすゝめることになりはしないだらうか」と問題提起していました。河本はそれを受け、東京版の巻頭での文学一般、人間の条件一般の議論の中に、原爆という、『希望』のルーツになる出来事を挙げたのです。事前検閲は二年以上前に終わっていたとはいえ、まだ占領下に創刊された雑誌のマニフェストに、このように原爆の問題を入れることが、勇気あるふるまいであったことは言うまでもありません。あえて危険を冒しても、広島というルーツ、そして原爆というルーツを、河本は東京で宣言してみせたのです。

1952年6月の2号では「新たなロマンの創造」という題で竹内康宏が、8月の3号では「われわれのテーマは何か」という題で再び宇野達樹名義の河本がマニフェストを書き継ぎます。竹内のものは方法論の追求でしたが、宇野こと河本は「原爆戦は、もはや、いかなる安全地帯をも残してはいない！」という現実認識を強調しながらも、「やはり、われわれは、死よりも生をえらぶ」と宣言しています。広島での原爆の経験と、冷戦下に高まる核戦争への懸念を背景としながら、タイトル通り希望に賭ける、というのが、東京版『希望』創刊時に共有されていたスタンスだったと言えるでしょう。

米軍占領が終わり、原爆の報道が解禁されてから出た2号に、河本は広島版3号に載せた「不吉な黙劇」の改作である「青空は死んでしまつた」を載せ、東京の読者にも被爆者の感覚を伝えようとした。同じ号に長田新編『原爆の子』の短い書評も載せて推薦しています。次に7・8月合併号として出た3号では「幻想の平和都市」という特集を組み、「ヒロシマで知識人は何を見たか」というアンケートと、金井利博と落藤久生（久義）による体験者のエッセイを並べ、世界のヒロシマとしての原爆の問題を立体的に捉えようとしています。ここで問題にされている「平和都市」は占領下の1949年に、長崎国際文化都市建設法と住み分ける形で公布・施行された広島平和記念都市建設法による呼称ですが、今日の目で振り返れば、1950年代半ばの後の原子力平和利用博覧会などの宣伝の局面において、広島をその重要な拠点とする布石ともなってしまったもので、アンケートやエッセイにおける批判は正当なものと言えます。11月の4号では、前号巻頭に「高良とみ女史の北京土産 写真ルポルタージュ 最近の中国」を寄せた母から一番遠いところへ留学したかったためアメリカインディアナ州リッチモンドのクエーカー教徒の大学であるアーラム・カレッジに留学したという高良真木が、ボストンで見た映画「セールスマンの死」についての論文を書き、同じ映画について劇作家の菅原卓を囲んで学生八人による座談会も開かれています。その後のページに「最もフランス的な芸術」としてのブラックの展覧会評を書いている妹の高良留美子も合わせると、高良親子の行き先と関心が冷戦下の中国、アメリカ、そしてフランスへと広がる配置になっていて、この幅の広さが、そのまま雑誌の性格を表しているようにも思わせられます。つまり、中国の毛沢東主義に深く影響された『人民文学』的な方向でもなく、占領期を経て大量に輸入された映画をはじめとするアメリカ文化を礼賛する方向でもなく、そしてまたシュルレアリズムやレジスタンスの根拠地としてのフランスに傾倒する方向でもない、重層的なものがこの雑誌の中には含まれているのです。

一方、先に広島版『Espoir』を離脱した俵やすをらのグループは、1952年2月に新たな広島版『エスポワール』（エスポワール編集室）を創刊しました。峠三吉資料の中に残されたものを宇野田尚哉さんが発見したのは7月発行の2号のみですが、活版で92ページにも及ぶ豪華なものです。泉和幸編集、山岡範幸発行のその雑誌の中で、おそらく泉の執筆であろう（I）と署名された「エスポワール・ルポルタージュ」は、その後の経緯を手短かに語っています。俵は既に不在となり、モナージュ（私の年代）という新しい文化団体も広島で活躍をはじめる中、東京版『希望』の河本と落藤が提携の誘いをしてきている、ということです。「三年間、二つのエスポワールの間に相当な構成と主張の開きが出来てしまつている点は即座に提携するを得ぬ原因となつてゐる」が、「今ここに合併出来ぬ事が何も対立を呼ぶものではない」とし、将来的な提携をおわせる内容です。残念ながら

その後の広島版『エスボワール』の消息はわかりませんが、東京に移った河本らが、広島とのつながりをも模索していたことは見てとれるでしょう。

4. 原子力のグローバル化に抗して

1953年に入ると、『希望』における原爆や戦争の捉え方に、アメリカの視点が加わってきます。8月の5号には、「国民文学論の総決算」というシンポジウムが組まれ、1951年からのネイションと文学をめぐる論争の当事者がコメントを寄せている一方で、先の高良真木子が訳したラス・ミラーの「死んだ水兵は知っている」という米兵の死を描いた、高良の呼び方では「アメリカの青年にとって「きけわだつみの声」」にあたる小説が掲載されています。また、短い文章ですが、落藤久義「映画 原爆下のアメリカ」が広島で上映された、被爆するアメリカの白日夢を描いた再軍備のためのプロパガンダ映画を批判し、小崎軍司「軽井沢の現状」が浅間山麓の米軍基地化への危惧を語っています。そして巻末には、東京大学合同演劇研究会の福田義之と、早稲田大学劇団自由舞台の藤田朝也による戯曲「富士山麓 四幕四場」が舞台写真と共に掲載され、開拓者部落の米軍への接收反対運動と、彼らに加えられる弾圧のことが描かれています。この号での学生演劇との接点や、国民文学論の考察が契機になったのか、この年から『希望』誌上には文学や演劇のサークルの紹介やアンケートが増え、『人民文学』、『新日本文学』、『列島』などに近い、サークル運動の中央誌的な役割を担うことにもなっていきました。なお、河本英三を編集兼発行人としてこの年3月に月刊で創刊されたらしい『連合文化タイムス EDITION DU ESPOIR』（エスボワール文化連合事業部）の第2号（4月発行）だけが日本近代文学館に収蔵されていますが、そこでもラス・ミラーの「死んだ水兵は知っている」が一面トップで同様に紹介されました。

10月の6号では「アメリカと原爆」という特集が組まれ、二つの論文が掲載されました。林克也「罪の誕生日——第三次大戦論の分析（上）」は副題通り、第二次大戦の終結とともに誕生したものとしての第三次大戦に関する議論を整理しています。大河内進「電気椅子の仕掛け——ローゼンバーグ事件の法的分析」は、ローゼンバーグ夫妻への死刑執行の不當さを訴えつつ、マッカーシズムの問題や全世界でのローゼンバーグ夫妻救援運動のことを紹介するものになっています。この問題は、小海永二のスローガン詩「潮——人間の愛と良心の名において」にも展開されています。

11月の7号でも、林克也「二十世紀の兵法——第三次大戦論の分析（下）」が前号に続いて技術の進歩と新しい戦争について分析し、結局「朝鮮戦争と原子力の国際的な発達」のためにアメリカの夢が破れ、第三次大戦論もついに延期を声明しなければならなくなつたと述べます。小林謙一「平和論の科学性」はマルクス主義の視点で人間性の危機と資本

制ブルジョア国家の関係について分析し、ソ同盟（ソ連）における原子力平和利用に人間性危機からの解放と世界平和の体制への可能性を見いだす議論を展開しています。両者とも、原子力をヒロシマ、ナガサキの被害だけに限定する見方は脱しつつ、冷戦体制の中での原子力のグローバル化を肯定する立場を打ち出しました。

ここでちょっと用語について説明しておきますが、1960年代の核拡散という言葉では、核兵器保有国の増加ということしか含意されません。ここでは、アメリカとソ連を中心とした核兵器の増加とその配備地域の拡大、南太平洋の島々を中心とした核実験場の拡大、そして「平和利用」の名の下に推進された原子力発電の拡大という、並行した三つの事態を連動するものとして考えてみるために、あえて“原子力のグローバル化”というこなれない言葉を使ってみました。7号の両論文はその問題を扱って肯定面を取り出しているわけなのですが、翌年三月の第五福竜丸事件以後、その論調は大きく転換します。しかしここでは先回りせず、順を追って見ていきましょう。

同じ7号の土井隆「アメリカの真空地帯——「地上より永遠に」をみて」は、アメリカの軍隊生活を描いた映画と、野間宏の『真空地帯』を対比して評するエッセイです。また、西野壽二「ルポルタージュ 日本赤線基地」は、東京都下の高校教師による、米兵によって犯された女性たちについての聞き書きです。両者とも米軍の暗黒面の、別の形での告発となっています。一方、小海永二「民族の黒い魂の歌い手たち——フランス黒人詩ノート（上）」は次号の（中）と合わせ（下）は別の詩誌『ぼくたちの未来のために』3号、1953年6月に掲載）、エメ・セゼールをはじめとする植民地出身のフランス語詩人を論じており、1990年代以降のポストコロニアルの文脈で脚光を浴びた詩人たちの作品の、きわめて早い段階での紹介だと言えるでしょう。

1954年1月の8号は、「新しい年への出発のために 一九五三年は若い世代に何であつたか」という、「政治・経済・社会」、「生活」、「文学・芸術」の三部に分かれたシンポジウム形式の共同研究座談会で幕を開きます。対日MSAや平和運動、学生の生活問題や中共貿易、国民文学論やルポルタージュなどが俎上に上る座談会の中で、朝鮮戦争休戦以後、まさに冷戦体制に入っていく世界情勢の中での日本の状況が浮かび上がってきます。

この号ではまた、巻頭に小林正樹監督、安部公房脚本の映画『壁あつき部屋』のスチールとシナリオ抄録による紹介があり、安部の「「壁あつき部屋」について」というコメントもあるので、前年に完成しながら松竹の政治的配慮で三年間も公開が延期されてしまった、BC級戦犯を扱った映画の概要を知ることができました。「文学・芸術」に関する座談会の中でも、この映画や戦犯問題が話題になっています。

1954年6月の9号は、巻頭に村上光彦「常に希望は地上に生きる ポール・エリュアール一周忌を経て」を置き、自らの死の朝にローゼンバーグ夫妻救済を訴えたという詩人

像と、その詩句から採られ葬儀の際に掲げられた「常に希望は地上に生きる」という言葉などを紹介しています。続く「文学は平和を求める」という講演会の記録では、阿部知二、野間宏、武田泰淳、広津和郎という有名作家が、スヴィフト、北村透谷とエリュアール、インテリと農民、松川事件などについての話をしています。巻頭エッセイと野間の講演とで、被爆後の広島で求められた希望というこの雑誌のタイトルが、レジスタンスの詩人の言葉としての希望へと更新されていくような形になっており、編集後記でも「エリュアールの「常に希望は地上に生きる」の詩のように、「希望」は、荒れ狂つたパニツクの中で、少しは姿を見せないがあつても、必らず生きています」と語られています。

この号で梶山季之が初登場し、小説「実験都市〈その一〉」を載せています。この小説は、原子爆弾障害調査委員会、略称A・B・C・Cで働く日本人、所長に近い日系二世、そこを取材に来た新聞記者とその施設でのストライキの発起者たちのドラマの中に、診察だけで治療はせず、人間をモルモット扱いするこの施設の問題を語っています。

1954年9月の10号は、「死の灰の下の青春——世代を結ぶ知的協力会議」というシンポジウムの記録を、50ページ近くにわたって掲載しました。河本英三によるものと思われます、扉ページに掲げられた開催趣旨が、第五福竜丸事件以後のムードをよく表しています。

放射能の雨が毎日降り続いた。その雲は、すべての日本人の上にひろがつている。しかも、その下では若い世代は更に自らの苦悩をうちに閉じ込めている。暗い谷間を生きてきた年長の世代も今度こそこの危機に際し、真剣に立ち向おうとしている。が、こゝに世代の裂目が問題になつてゐる。私達は、この裂目があるなら、それは何故、どういうものか、それをはつきりみつめねばなるまい。そして、そこから、今、必要とされているほんとうの結び目を探し出さねばならない。

このように世代論を前景化させることは、真善美社編集部編『公開状——若き世代の立場から』(真善美社、1947年)と、真善美社編集部編『世代の告白——転形期の文学を語る』(真善美社、1947年)とを出した花田清輝の影響を強く感じさせます。ここでは議長の提言の後、「年長の世代より」として石母田正、園部三郎、白井健三郎、武谷三男の四人、「若い世代より」として奥津武郎、尾崎正治、そして河本英三の三人が議論に参加しています。話題は多岐にわたりますが、この場での関心に直結するのは、武谷三男と河本英三のやりとりでしょう。「死の灰の下の青春」というタイトルで「あと二年くらいで皆さんの青春もおしまいになるかもしれない」と提題した武谷に対し、河本は広島で原爆にあつた自分としては「極限を超えた恐怖は逆に無感動となるから」恐怖にはピンとこない、「何

か原子爆弾あるいは原子力というものを、ほんとうに平和的に使つたら、人間は容易にいいこともできるのだ、こういうふうに考えて来ると、何か楽しくなつて來るのです」と述べています。武谷もそれに応じ、「将来の原子力の発達というものは、すばらしいものであるべきだと思います。ただし日本の改進党の原子力予算などというものは、汚職と混乱を生むだけであろうと思います」と現状に留保をつけながら平和利用への希望を語っています。

こうしたやりとりを見ると、このシンポジウム、また河本の主宰したこの雑誌が原子力を肯定しているように見えますが、そこには様々な屈折があります。日本の学者が水爆の灰の分析結果を発表してソ連を利することになったことを批判して「アメリカに第五福竜丸をジープに札束を積んで買いとつて貰えば、その方がよかつた」と書いた中谷宇吉郎に憤慨する石母田は、「憤りだけではどうにもならない、それを科学にまで高め、思想にまで高めなければならない、またその意味でも誤った思想と闘わなければならぬのです」と述べています。園部はコンクレート・ミュージック（具象音楽）や電子音樂をヒューマニズムに対置する動きに対し、「科学や機械が人間を圧倒することは事実であつても、人間が自ら発見したものを自らの幸福に使うかどうかによって、科学は人間の不幸の創造者にはならないはずです。またそのような間違つた傾向——たとえば、原子爆弾や水素爆弾を使うという脅迫によつて平和を保とうとするような考え方——これこそがヒューマニズムの破壊であり、そういうものと闘かうことこそがヒューマニズムの形式だと思います」と述べています。前年末にアイゼンハワーが打ち出した「アトムズ・フォー・ピース」と、それに呼応して当時の野党たる改進党の中曾根康弘らがつけた原子力予算の問題を、武谷は明確に批判していますし、石母田と園部もこうしたアメリカの路線に反対を示しています。この号の巻末には、「原爆、水爆の連鎖反応を喰いとめる唯一の希望は、人間の連鎖反応にあると思い、「希望」誌を一つのきっかけとして、働く人、学生、市民が、より人間的に生きようという願いで内的につながり、そのむすびつきを深めて支え合つてゆく、「希望」文化サークルを、そういうものにしたいと思います」という「「希望」文化サークルの提唱」が置かれています。原子力に対抗する人間の連鎖反応という語彙の感染が目を惹きますが、この提唱が内実を伴うことはありませんでした。『希望』の次号となる11号が出たのはこれから10ヶ月後の1955年7月、しかもそれが最終号となってしまいました。

11号の巻頭の特集は「日本インテリゲンチャ論1」で、この号の発行費用を負担したという久保田芳太郎が伊藤整を「近代の純粹培養」として、河本英三がチェホフと荷風を「臨終者用祈禱書」として論じています。河本はその結論部で次のように書いています。

人はあるいは云うかも知れない。

冷戦下の『希望』（鳥羽耕史）

“世界はすでに半ば解放され、今、まさに解放されつつあり、民衆は自らの歴史的行動の何たるかを知りつつある。原子力の解放も、その上に立つて、特に、新しい人類の朝を告げるものである”と。

しかし、歴史へのオプチミズムが必ずしも、われわれの生き方を導く至上のものでもなく、地球の半ばの社会主義化が必ずしも希望の充分な材料でもなく、半ばであるということそのことによつて、絶望の材料としても充分たりえます。原子力の解放は、更に更に絶望の材料として、よりふさわしいあります。

先のシンポジウムで平和利用への希望を語った河本の面影は、ここにはありません。そしてこれが、広島から出発して、資金難と戦いながら続けてきた『希望』の運動の到達点でもあったのです。野間宏、安岡章太郎を訪ねた「作家との対話」のコーナーも「原子力時代と文学」と題し、第五福竜丸以後の情勢に対応できていない文学に絶望を感じるというところから問い合わせを発しています。しかしこれまでKのイニシャルで編集後記を書き、編集兼発行人として名前を出してきた河本英三による編集態勢は、最終号で崩れました。編集後記はK U（資金を出した久保田でしょうか）とE・K（黒羽英二でしょうか）の二人が書き、編集人は梶山季之を代表とするエスボワール編集部、発行人は磯部巖、そして発行所は思潮社ということになりました。ただしこれは1956年に小田久郎が創業した詩書出版社とは別会社で、阿佐ヶ谷にあった梶山の事務所だということです。

梶山はこの号に小説「闇のなか」を載せています。これは『広島文学』1953年5月号に載せたものの再録のようですが、梶山のルーツであり生涯のテーマともなった韓国併合後の朝鮮の問題を扱ったもので、8年後の直木賞候補作「李朝残影」にも通じるものです。アメリカが“戦争を終わらせるために”投下したという原爆の被爆地からスタートした『希望』は、ここでその戦争につながった日本の植民地支配を描いた小説を掲載することで、戦争の終わりから始まりまでの円環を閉じたと見ることもできそうです。

広島版『Espoir』が戦後第一期のサークル誌としてスタートを切った後、上京した河本による東京版『希望』は、花田清輝らの『綜合文化』をモデルにしたような、戦後文化運動の雑誌へと舵を切りました。そして1953年の5号以降は、さらに1950年代サークル運動の中央誌的な役割を担いつつ、一貫して原子力のグローバル化への関心と、次第に深まる危機への抵抗の姿勢を見せていったのです。

岩崎清一郎は、『希望』が“政治と文学”論争以後の思想的・文学的立場を選択した「新日本文学」につながる方向と、発足当時のエスボワールが目指した学生を軸とする総合文化雑誌の趣意を引き継ごうとする方向のふたつ」の可能性をもつていて、後者の可能性が河出書房の『知性』に継承されたが、前者は端緒にとどまったと述べています。先の整理

冷戦下の『希望』（鳥羽耕史）^{エスボワール}

ではサークルの中央誌的な役割が頓挫し、戦後第一期のサークル誌としての可能性が継承されたということです。

高良留美子はこれに対して、「『希望』が文学・文化・芸術運動という形で未来への希望を実現しようとした指向を、氏は見逃している」と指摘し、自分たちは「読者に開かれた文学運動の場がしだいに狭められていくなかで、野間宏や花田清輝のいる同会に参加した、といつてもそれほどまちがってはいないだろう」と述べています。つまり戦後文化運動の雑誌としての性格を強調しているのです。

このように、『希望』は、近いところから見ていた人や、当事者のそれぞれによっても、違う像を結ぶ多面的な雑誌です。今回は「グローバル冷戦と文化」の文脈から、その一面の紹介を試みましたが、省略せざるを得なかった部分の方がはるかに多いのです。これまで名前のみ知られながら幻の存在だったこの雑誌が、今回の復刻を契機に、戦後の文学、文化に関心を持つ多くの人によって読まれ、研究されるようになることを念じつつ、拙い報告を終えます。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- 岩崎清一郎「広島の文学——ゆかりある作家たち（六）戦後篇」『梶葉——かじのは』通巻Ⅷ・終刊特別号、2000年7月
高良留美子「『希望』復刻版 解説」『復刻版『希望』別巻』三人社、2012年
新保敦子「日中友好運動の過去・現在・未来——高良真木のオーラルヒストリーに依拠して」
『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』23号、2013年3月

(とば こうじ 早稲田大学文学学術院教員)